

「ふるさとの記憶」を災害から守り、未来につなぐための教育普及活動

法文教育学域教育学系 佐藤 宏之
教育学部4年 土居 祐綺

1. はじめに

本事業は、「ふるさとの記憶」を自然環境（地震・津波・集中豪雨・噴火など）の変化や歴史環境（急激な人口移動や高齢化・代替わりなど）の変化から守り、未来につなぐための取り組みを教育普及することを目的とする。

歴史資料とは、そこに人びとが暮らしてきた証であり、「ふるさとの存在証明」というべきものである。それはたまたま遺っていたというような偶然の産物ではない。さまざまな政治的変動や災害（戦災・自然災害）、歴史書の編纂事業、他文書の流入といった、いくつもの史料滅失の危機から免れ、大切に保管されてきたものなのである。

記録や記憶を未来につなぐこと。こうした文化的な営みが、復興への道を歩んでいく人びとを結びつける紐帯となることは、阪神・淡路大震災以降、東日本大震災に至るまで、各地の被災地で実証的にあきらかにされてきたことである。わたしも 2013 年度より「鹿児島歴史資料防災ネットワーク（準備会）」(<http://kagoshima-shiryounet.seesaa.net/>) を立ち上げ、県内各地に遺る歴史資料の保全活動に取り組んでいる。

したがって、こうした歴史資料がなくなれば、そこに人間の営みがなかったことになってしまう。建物にはそれぞれ耐用年数があり、壊れたらその都度修理したり、建て直したりすればいいのかもしれない。しかし、人の命や歴史資料、文化財は唯一無二のものであり、取り替えがきくものではない。まして、意識的に遺そうとしなければ遺らないものでもある。しかしながら、膨大な歴史資料を目の前に、専門家「のみ」でそれを共有することができないのが現状である。

そこで本事業では、①地域の人びとの歴史資料に対する意識を変え、②歴史資料を保全する技術や方法を身につけ、③その担い手を育成するためのワークショップを開催することにした。

2. 出水市における歴史資料保全活動

鹿児島県出水市は、江戸時代より戦後にいたるまで戦の拠点（麓地区武家屋敷・海軍航空基地）があり、そこに数多くの戦闘員（武士・隊員）が暮らしていた。まさに武力（軍隊）と地域との関係を考えるうえで格好の場所といえる。こうした関係性を考えるうえでも、地域に残された歴史資料を発掘・保全し、活用する手立てを講じる必要がある。

とくに出水市には、1940年に海軍航空基地が建設され、訓練基地として練習航空隊が配備された。1945年3月に戦闘部隊専用の基地として利用されるようになると、そこから数多くの特別攻撃部隊が飛び立った。また、同年3～8月に計6回、アメリカ軍による空襲を受けている。そして、今も地下戦闘指揮所、掩体壕、滑走路跡などの戦争遺跡が存在する。



現在、出水市において、「戦争の記憶」を有する最も若い世代に属する80歳以上の人が5,933人（市の全人口の10.9%）、そのうち軍隊の経験を有する最も若い世代に属する90歳以上の人が1,260人（同2.3%）を数える（2017年2月1日現在）。体験者本人の生の声で証言するという事は、ここ数年以内に確実に不可能となり、従来の歴史研究の基本である文字記録によってしか研究ができなくなるという状況がやってくる。体験者の消滅によって、文字記録主体の「普通」の歴史研究になってしまう。体験者の証言をこれからも活用し続けていく方法論を模索し、構築すべきではないだろうか。

わたしは、2014年度より出水市教育委員会と（一社）出水民泊プランニング・平和学習ガイドのみなさんと「出水市戦争遺跡等保存活用プロジェクト」を立ち上げ、戦争遺跡の保全、戦争や戦時の生活をうかがい知れる資料の収集、戦争体験者への聞き取り調査などを行ってきた。出水市内全戸へ自治会のみなさまの協力を得て情報提供を呼びかけるビラを配布・回収し、これまで約100名の証言を映像と音声で集めることができた。なかには、戦時中に書かれた日記や「軍極秘」と朱印が捺された資料など、当時の生活をうかがうことができる新たな資料を発見することもあった。

3. 教育普及活動

2016年4月14日に発生した熊本地震の後、鹿児島県においても地震（災害）に対する危機意識が高まったように思われる。

3-1 2016年5月27日出水市立出水中学校での講話

出水市教育委員会の協力を得て、出水中学校2年生を対象に、「地域の歴史を守り、未来に伝える—歴史資料の保全と戦争の記憶—」と題する講話とグループ活動を行った。

講話の内容は以下の通りである。

まず、「歴史資料」とはなにか。それは社会との関わりの中なかで作成される、地域の「記憶」出有り、地域の「履歴書」であるということ。

それが、自然環境（地震・津波・集中豪雨・噴火など）の変化や歴史環境（急激な人口移動・高齢化など）の変化によってなくなる可能性があるということ。熊本地震では文化財に大きな被害があったことはよく知られているが、一般家庭にある歴史資料（古文書など）を救済する活動が始まったことを紹介した。

こうした歴史資料を、どうしたら遺すことができるのか。それは現物を、そのままの状態、現地に遺すことが一番である。しかし、それがかなわないときは、デジタルカメラで撮影しておくことがもっとも簡単な保全の仕方である。それは、不幸にして現物がなくなったとしてもデジタルデータとして遺っていれば、それを活用することができるからである。

実際に、出水市で多くの資料が発見され、そのデジタル化を進めているところである。

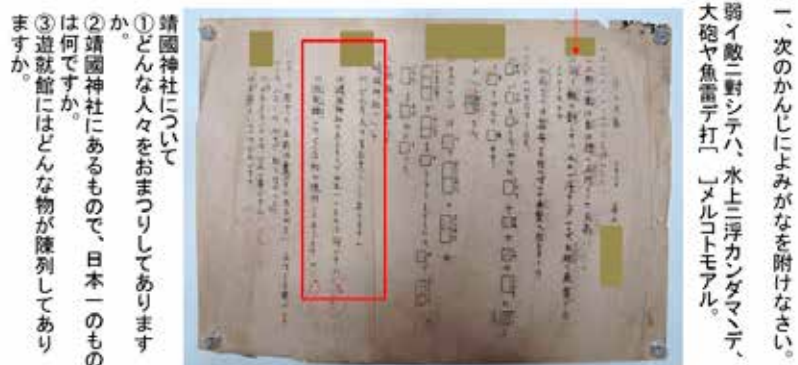
下の写真は尋常小学校5年の「讀方考査」である。

漢字に読みがなを付ける問題では、「弱イ敵ニ對シテハ、水上ニ浮カンダマ、大砲ヤ魚雷デ打〔 〕メルコトモアル。」とある。

また、靖国神社について、「①どんな人々をおまつりしてありますか。②靖国神社にあるもので、日本一のものは何ですか。③遊就館にはどんな物が陳列してありますか。」ということが設問になっている。いずれも現代では設問にすることができないものであるが、当時の学校教育の一端をうかがうことができる貴重な資料ということができよう。

6. 出水で発見された資料

・「讀方考査」（尋常小学校5年）



日記、生活の記録、教科書、ノート、プリント、テスト、写真など、日常の、なんの変哲もないものが、その当時の地域の様子、生活の様子を教えてくれる貴重な資料となり得るのである。これらの資料はいずれも重要文化財などではない。したがって、日々廃棄されているのである。

しかし、100年後、1000年後を考えたとき、わたしたちが普段使っている日記や教科書、ノート、プリント、テストなどが貴重な資料となり得るのである。そう考えたとき、現在の歴史をまさにいま、自分の手によって作ろうとしている、自分が歴史的な存在であることに気づくのである。そこで、歴史資料と、それが語る歴史を伝える意味を考え、歴史資料がなければ、そこに人が「いなかったこと」、歴史が「なかったこと」になってしまう。しかし、それは意識的に遺そうとしなければ遺らないことを学んだ。

その後、講話をふまえたグループ活動を行い、以下のようなまとめを行った。

「地域の記録やそこにいた人々の生活を知ることができるとても貴重な資料だと思う。その資料の中には、現代に活かせるものもあるので、大切にしていけないといけないと思う。」

「高齢化により、なくなったり、すてられたりする。災害などで守りたくても守れない、苦しい状況である。だから地域や個人をこえた保全をすることが大切である。」

「今の状況を1人1人が、自分の歴史として未来にのこすために、自分たちが、今の状況を記録して大事に残していくことが大切だと思います。」

「歴史資料など、紛失してもいいように、カメラでデータを残したり、住まなくなった家などをこわす前に、文化財レスキューの人たちが文化財を守る取組をしている！！」

「勝手に判断され、捨てられてしまう。残そうという意識がない。つまり、歴史資料への関心が低い。」

「歴史資料に関する仕事をしている人がいることや、歴史資料の大切さをよびかけ一人一人が残そうという意識をもつ。」

【講話のようす】



【生徒の感想】

印象に残ったこと、新たに気づいたこと、疑問に思ったこと、考えたことなど、講話を聞いた感想をまとめよう！

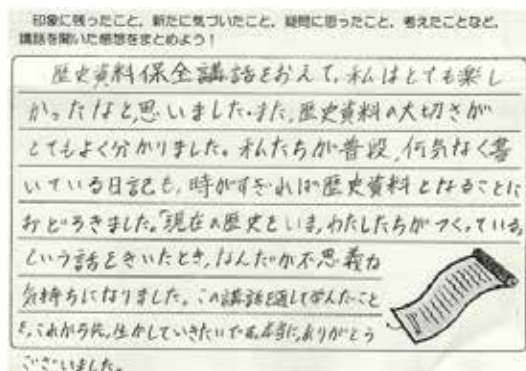
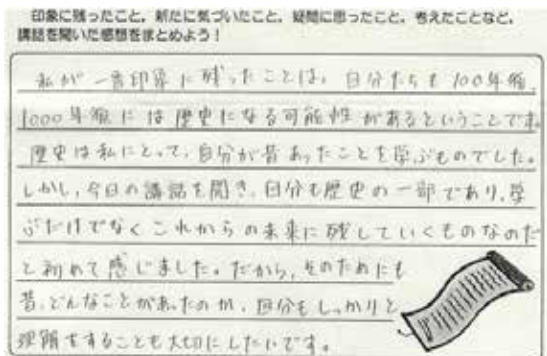
今日の平和学習を通して疑問に思ったこと、考えたこと、新たに気づいたこと、疑問に思ったこと、考えたことなど、講話を聞いた感想をまとめよう！

今日の平和学習を通して疑問に思ったこと、考えたこと、新たに気づいたこと、疑問に思ったこと、考えたことなど、講話を聞いた感想をまとめよう！

今日の平和学習を通して疑問に思ったこと、考えたこと、新たに気づいたこと、疑問に思ったこと、考えたことなど、講話を聞いた感想をまとめよう！

印象に残ったこと、新たに気づいたこと、疑問に思ったこと、考えたことなど、講話を聞いた感想をまとめよう！

私は前より歴史を大切に保存しているという意識がなかった。今日の講話を通して、歴史を大切に保存することの重要性を改めて認識することができた。また、歴史を大切に保存することの重要性を改めて認識することができた。また、歴史を大切に保存することの重要性を改めて認識することができた。また、歴史を大切に保存することの重要性を改めて認識することができた。



この活動を通して、「歴史資料を未来につなぐために、いまの自分にできること」を確認できたように思われる。

この講話・グループ活動は、「歴史資料の保全意義を学ぶ」（南日本新聞／2016年6月5日付）で紹介された。

3-2 「歴史資料」を未来につなぐワークショップ

出水市麓地区の旧二階堂邸（現、中井勝郎美術・古文書館）より、江戸時代の古文書や戦時体制を支える青年団の活動記録など、多数の歴史資料が新たに発見された。

そこで8月26日、出水市教育委員会との共催で、中井勝郎美術・古文書館において、市内の中学生11名と同館所蔵資料の保全活動を行った。5月27日の講話・グループ活動に参加した生徒も多数参加してくれたことが印象的だった。

新たに見つかった江戸時代や戦時中の書物など300～400点を、わたしたちが日ごろの保全活動で行っているように、デジタルカメラで撮影し、中性紙封筒に詰め替え、文書箱に保全する作業を体験してもらった。

暑いなかでの作業であり、史料の扱いやデジタルカメラの扱い方など、最初は緊張と戸惑いを隠せなかったが、自分たちでやりやすいよう工夫しながら作業を行っており、その姿に頼もしさを感じた。

生徒全員に「歴史資料を未来につなぐ担い手」としての「認定書」を手渡しして終了した。

【作業の様子】



この活動は、「歴史資料の保全、中学生が作業体験」（南日本新聞／2016年8月30日付）や、「後世に残す意義 ふるさとの記憶をつなぐ」（広報いずみ／2016年10月号）で紹介された。

また、場所、資料など、さまざまなサポートをしていただきました東久保隆館長に心より御礼申し上げます。

【認定書】



3-3 「戦争の記憶」を未来につなぐ」ワークショップ

8月27日に、出水市教育委員会、鹿児島大学教育学部田口紘子研究室（社会認識教育学）と共催、（一社）出水民泊プランニング・平和学習ガイドのみなさんの協力を得て、出水市内の中学生を対象にワークショップを開催した。

地域の記憶や歴史は、なにも自然災害だけではなく、さまざまな政治的変動や戦災によっても消滅する危険性がある。まして、体験者の記憶は、その体験者の消滅によって失われていくものでもある。直接体験を持たない世代、戦争や植民地支配の過去を知らず、その史実を十分に学んでこなかった世代が、記憶をどう受け継いでいくのか。今日の教育的・社会的な課題といえることができる。

先述の通り、出水市では1940年に海軍航空基地が建設され、訓練基地として練習航空隊が配備された。1945年3月に戦闘部隊専用の基地として利用されるようになると、そこから数多くの特別攻撃部隊が飛び立った。また、同年3～8月に計6回、アメリカ軍による空襲を受けている。

地域の人びとは、国防上の要地であること、経済の活性化、雇用の確保から基地を誘致し、用地の提供や労働力の強制的／自発的な提供、基地発足後は雇用、隊員との交流、勤労働員、基地への慰問などを通じて関係を結んできた。今も地下戦闘指揮所、掩体壕、滑走路跡などの戦争遺跡が存在する。

このワークショップでは、その戦争関連施設（基地（滑走路、地下戦闘指揮所など）、防空壕など）と戦争体験者の講話を通じて、「戦争の記憶」を未来へつなぐために、自分たちにできることを考えてもらう契機とした。

そこで、ミッション①「戦争関連施設と出水の人々にはどのような関係があったのか、解明せよ」を与え、「事前学習」で基地の成り立ちと出水の人々との関係、「見学体験」で地下戦闘指揮所、士官宿舎跡、気象観測所跡、滑走路跡、防空壕、掩体壕、隊員の下宿先、民家の防空壕を実際に見て廻り、基地と出水の人々の関係、空襲が人々に何をもたらしたのか、なぜ出水が狙われたのか、「体験者の講話」で疑問点を体験者へ質問し、その成果を、ミッション②「出水の戦争関連施設ツアーをPRするポスターを作成せよ」で、自らが見学体験のなかで撮影した写真、証言・説明メモ、画像集を使って1枚のポスターを作成してもらった。

【ワークシート】

【ポスター】



このワークショップの狙いは、参加者に戦争は遠いところで起こったことではなく、自分が住んでいる地域でも起こっていたことを理解すること。そのためには、戦争の悲惨さや過酷さを描くだけではなく、実際に軍隊や戦争を受け入れた社会を知り、その当時の人が見つけていた問題

を発見することにあつた。

【学習のようす】

基地と出水の人びとの関係は、当初は「基地を歓迎し、誘致する地域」であつた。それが基地が発足すると、「基地と交流し、共存する地域」へと変化していく。それゆえに、空襲を受けることになるのである。戦地に行っていない人びとであっても、いつの間にか戦争に巻き込まれていたということができよう。

戦争の傷を抱えて生きている人びとへ共感を寄せ、同じ悲劇が決してくり返されることのないような手立てをどう講じていくのか。そのためには、なにがあつたのか、なにが起きたのか、

想像力を働かせることが重要なのであり、今後、どのような社会を作りだしていくのか、一人ひとりが構想し、行動することが重要であるということが確認できた。

そのためにも、戦争体験者から集めた「記憶」を不特定多数の利用者を想定した「公共財」として新たに価値づけし、その利活用の目的性を問わない記録として後世へ伝えていくためのアーカイブズを構築することが重要であり、そのアーカイブズに基づいて、地域観光や学校教育の場で利用できる平和学習の新たな可能性を探究していきたいと考えている。



3-3 学校教育と連携する意味

本事業を進めるにあたり、将来教員を目指している教育学部の学生に協力をしてもらい、歴史資料の保全活動を実際に体験し、その意義について考えてもらう機会とした。

それは、教育学部の学生が将来教員として赴任したさい、その赴任先で資料保全活動の「中核」になり得る存在だからである。

こうした教員は、赴任先で地域の歴史資料を守り、伝えることの重要性を認識する人を増やすことができ、なおかつ保全活動の中心的存在として実施することが可能である。そうすることで、日々失われる歴史資料を少なくすることができるだろう。

すなわち、学校と地域が一体となって、歴史資料を守り、伝えていくという意識を醸成することが可能となるのである。

また、子どもたちとともに歴史資料の保全活動を行うことで、子どもたちの身近に歴史資料があること、自分がいま使っているものが100年後、1000年後に歴史資料になり得ることを理解させることができる。そのことによって、子どもたち自身が過去と未来をつなぐ歴史的存在であることに気づくことができるだろう。そうすれば、「自分たちが失われる歴史資料を守らなければならない」「自分たち

もまた歴史資料を生み出す存在であるんだ」という意識を育むことができると思う。

そう考えたとき、子どもたちは過去



と未来をつなぐ「歴史を保全する人」であると同時に、「新たに歴史を作る人」でもあることを理解することができるだろう。

学校教育との連携は、単に「次世代の育成」や「後継者を育てる」ということ以上の役割を担うことができるのである。

4. おわりに

日々廃棄あるいは発見される歴史資料は膨大であり、それを保全する（できる）人の数は限られている。すべてのことが専門家「のみ」でできるわけではない。したがって、こうした活動ができる人材を育成し、その輪を広げていくことが重要になってくるだろう。

また、地域の人びとの手によって「ふるさとの記憶」をさまざまな災害から守ることは、「ふるさとの再生」を準備することにつながる。

今後もこうした意識変革と人材育成という地域がもつ課題の解決を通じて「ふるさと」の発見・発掘に取り組んでいきたい。

【附記】

本事業は、鹿児島大学地域防災教育研究センター・平成28年度特別経費「南九州から南西諸島における総合的防災研究の推進と地域防災体制の構築」およびトヨタ財団・2015年度研究助成プログラム「戦争の〈記憶〉の継承とその利活用に資するアーカイブズの構築およびそれに基づく平和学習の新たな可能性の探究—平和を希求する心を育むための試み—」（研究代表者・佐藤宏之）による研究成果の一部である。

5月27日の講話には、丸山翔太さん（教育学研究科2年）、畑中愛斗夢さん（教育学部4年）、土居祐綺さん（教育学部4年）、8月26日のワークショップには、土居祐綺さん、寺内愛さん（教育学部3年）、遠竹ゆき菜さん（教育学部3年）、矢野真帆さん（教育学部3年）、伴野文亮さん（一橋大学大学院）、比江島大和さん（一橋大学大学院）、8月27日のワークショップには、深瀬浩三先生（教育学部講師）、土居祐綺さん、寺内愛さん、遠竹ゆき菜さん、矢野真帆さん、伴野文亮さん、比江島大和さん、松元愛実さん（教育学部3年）にご協力いただきました。ありがとうございました。

なお、教育普及活動に関する成果については、第3回全国史料ネット研究交流集会（2016年12月17,18日・愛媛大学）において、土居祐綺が「鹿児島資料ネットと学校教育の連携について」と題する報告を行った。